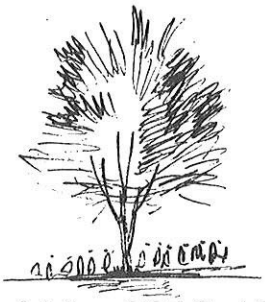
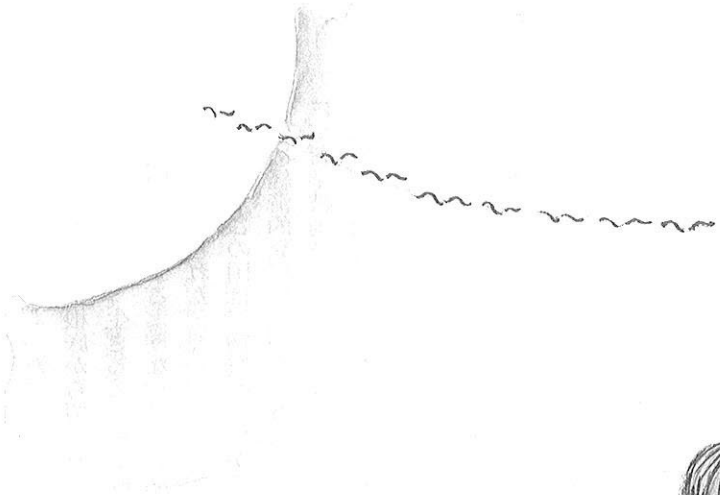
ひかりのこ

光の子



No.144　2010.10.15

●年間聖句　友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。
（ヨハネによる福音書15章13節）



「さおになって」　挿絵・中島英子

墓ひとつ
八朔の畦にぎやかに老の声
汲み上げし閼伽にひしめく秋の風
露けさの湯呑みが二つ縁の上
野送りや案山子いづれも傾いて
威銃じわじわ日暮きたりけり
使はずの竈に秋日濃かりけり
墓ひとつ埋もれてゐたる花野かな

黛　執
（「春野」主宰）

発行／社会福祉法人　光の子どもの家　TEL/0480-72-3883　FAX/72-6649　振替／00130-1-128022
編集／光の子　編集委員会 e-mail:hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp　〒349-1155 加須市砂原277　印刷／プリンテング瑛和

痛まない福祉

菅原哲男

大阪で乳幼児のきょうだいの実母が子育ての煩わしさから逃げ、放蕩に溺れて顧みず、二人は餓死し腐敗するまで放置された事件があった。

常識が基の日常が根底から覆される程の大きな衝撃や、生きることの意味を突然問われ窮するようなやりきれなさを感じさせられた。

これまでこの国は、物質的な豊かさを求め経済的発展に一切を賭けたように、科学技術を駆使し、人間関係も含めた豊かな自然環境を売り払いながら現在にたどり着いている。

一貫して楽に快さを手に入れることを目的にしてきて、私もその恩恵に預かっている。このような痛ましい事件を繰り返し見させられているのはその報いかとさえ疑う。

煩わしさから逃げて楽に、とは傷つき痛むことを避けることである。この実母だけではなく社会全体が痛み傷つかないために、心や力を使い果たしている。

児童養護施設の多くのはたらきも、子どものためによりは、子どもの暮らしを知らない役人の監査をクリアするためにしているのではないかと訝るほどである。不祥事の報道などがあり、県が立ち入り調査をしたなどの情報があると、そうならないように気をつけよう、と思ってしまうのである。

子どもの暮らしや願いや痛みなど何も関わりのない第三者が子どもの暮らしの質量を評価するという、第三者評価の問題も、可能性も含めて再検討すべきだろう。これなども私たちの、焦りや守りの杞憂を増幅させて益のないことだろうから。

前述の大阪の事件では、児童相談所の対応がバッシングされた。児童相談所が適切に対応していれば…地域がもっと監視するべきだ、云々である。一般には受け入れられやすい。とりあえず私とは関わりのないところで責任を持ってもらい、私はするりと逃られるからである。そのうちに監視カメラだらけの社会ができあがるだろうから。

あらゆる子どもの事件や問題に児童相談所は適切に対応するべきだろう。しかし、そのようなもの言いをするいわゆる識者たちのほとんどは、本当に児童相談所は適切に対応できると思っているのだろうか。彼らは児童相談所の門前に立ったこともないのではないだろうか。その当事者であったワーカーや責任者たちは、なんで私のところでこんなことが起こったのだろう！と不運を嘆いたことだろう。だからそれ以外のところではそのような事件に巻き込まれないよう、マニュアルを作り用心するようになるのだ。

不祥事が明らかになる度に責任を逃れまくり痛むことを避け続けるお役人や施設長たちのなんと多かったことか、とこれまでのおつきあいだけでも思うことしきりである。

杞憂を前提にしたはたらきが蔓延していることに気づく。杞憂とは中国の杞に、天が落ちることを心配して寝食をとれない人がいて、そんなことはないことを教えその憂いを解消した寓話が典拠のようである。

落語に縁台将棋の風景がある。相手が唸りながら一向に仕掛けてこない。こう攻めれば相手はこう来る、だからこう攻くとこうなるだろう。何もせず「負けた」と投了する話だ。

お話にも勝負にもならない。

先頃「児童養護」は施設長を特集していた。特集のリードは期待を持たせたが内容はいまいちだった。責任者が責任を負えば済むことをきちんと伝えてほしかった。大人や子どもに出来るだけ自由に暮らしてもらい、うまくいったら評価し、まずかったら、任せた者として責任を負えばいいだけの話である。責任者とは責任を他者に追求する者ではなく、それを痛みながら負い続ける人のことと、端的に示してほしかった。

親や養育者とは本来、子どもによってもたらされるどんなマイナス状況でも、逃げずに隣りながら関わり続け、居続け、痛み続け、乗りこえようとする者であるのだから。

「共育ちカンガルー日記」(8) 告知

近藤　みちる

その日も残暑は厳しかったが、立秋を過ぎた八月の空は心なしか高く感じられた。療育センターのプレイルームの窓の外には、百日紅が真っ赤な花を枝いっぱいに咲かせ、ときおり重たげにその枝を風に揺らしているのが見えた。

娘はいつものように床に座り込んで、お気に入りのブロック遊びに夢中になっていた。

「娘さんは自閉症と思われます。」その日、私たちは医師から初めて娘の障害の告知を受けた。ここに通い始めて一年を経ての告知であった。

一年前、初めてここを訪れた時、私は娘が自閉症であるのかどうかをはっきり聞きたいと相談員に詰め寄ったものだった。当時の私たちにとって、その一点が非常に重大な問題であった。白なのか黒なのか。それによって娘や私たちの人生が大きく左右されるものだと思い込んでいたからである。相談員は私たちを医師に引き合わせようとしなかった。

その後娘の療育が開始となり、私たちは多くの療育の先生方に出会った。彼らは混乱した私たちにそっと寄り添いながら、娘のゆっくりとした成長を共に喜び、娘の持てる可能性を信じることを、身を持って示してくれた。一年という時の流れは、私たちに娘のありのままを受け入れることを教えてくれた。おそらく娘は自閉症であろうという辛い現実にも向かい合えるだけの強さと、自閉症であってもなくても親としてやるべきことは何一つ変わらないという信念を授けてくれた。そして、いつしか私たちにとって、娘が自閉症であるか否かは大した問題ではなくなっていた。「この子の笑顔が消えないように育てていこう」それが私たちの目標となった。

この夏娘は三歳を目前に控え、私たちはようやく医師の診断を仰ぐこととなった。娘の療育環境を整えていくための様々な準備を始める時期が迫っていた。もう覚悟は十分に出来ていたので、告知によって動揺することはなかった。医師の言葉を静かに聞きながら、無邪気に遊ぶ娘の背中をただ見つめていた。

面接を終えると、娘は待ちかねたように裏庭へと駆け出して行った。センターに併設されている知的障害者施設の敷地は広大で、建物の奥には入所者のための広い芝生の広場があった。月に一度このセンターに通ううちに、この広場はすっかり娘のお気に入りの場所となり、面接を終えると、そこで小一時間遊んで帰るのが日課となっていた。

娘の後を追いかけてその広場へ出ると、日の盛りを過ぎた空に無数のとんぼが飛んでいた。娘はとんぼを追いかけて、広場を縦横無尽に走り回っていた。私と夫は木陰を探して芝生の上に腰を下ろした。

「本当はね、まだ首もすわらない赤ちゃんの頃から、どこか普通の子と違うってわかってた。」私はそう言って、娘と歩んできた日々を思い返した。赤ちゃんの頃から目が合わない子だった。人見知りも後追いもしないかわりに、家族にさえもなかなか懐かなかった。どんなに声をかけても笑いかけてもそっぽを向かれ、いつも母の思いは一方通行だった。

娘に最初に行われた療育は、人の顔を見る訓練だった。訓練をしなければ人の顔を見ることができないのかと、最初は愕然としたものだった。手と顔がばらばらのものではなく、同じ人物にくっついていているということでさえ、理解させるのに数か月を要した。気の遠くなるほど根気のいる訓練だったが、娘の中で何かがつながり始めたのか、少しずつ人の顔を見ることが増えてきた。物の名前の一つでしかなかった「おかあさん」という言葉で、母親を呼ぶことができるということに気づいたのもこのころだった。

「よく笑うようになったよな」傍らで夫がつぶやいた。そうだ。娘はいつの間にか、自分から私たちに笑顔を向けてくれるようになっていた。そのとき、なぜだか突然涙が溢れてきた。自閉症と診断されても、娘は娘。生まれた時からずっとそうなのだから、これからも今までと何が変わるわけではない。それでも、娘の背負っていく障害の重さを改めて思い、元気に走り回る娘の愛らしい笑顔を見ていると、切なさに押しつぶされそうだった。

「泣いたっていいんだよな。」夫が言った。

「でも、明日からは笑顔で育てていこう。」私たちの目標が、このときまた一つ増えた。いつの間にか空には、鰯雲が広がっていた。

川の字に寝そべってをり鰯雲

みちる

エッセイ

三橋美智也そしてシベリウス

彫刻家　中島　睦雄

例によって、埼玉中央フィルの吉田団長さんからの電話が入り、三十分後に行くからと言ってきた。

そこで私は、今日は何の曲で迎えようかと考えた。そうだ、ここのところよく聞いている三橋美智也の歌にしようと決めた。

クラシック音楽の吉田さんを歓迎すると同時に、少しからかってやろうという気分も含んでいる。吉田さんなら何を流しても決して怒りはしないから。「おっ!!今日は三橋美智也ですか？オホホ。」という調子であろう。したがって、或る時はナニワブシを流してみたり、軍歌にしてみたり。もち論、私自身も楽しんでいる訳であるが。

やがてやって来た吉田さんは「おっ、三橋美智也ですか。あの人は実に歌がうまいですね。少年の頃から実にうまかったんですよ。」と言う。吉田さんの話によると、何十年も以前、綱島温泉に言ったことがあったが、そこで聞いた少年の歌が実にうまいので驚いたという。この少年が、後の三橋美智也だったというのである。

「あの人は天才なんですよね。」とCDで流れる歌に聞き入っている。

歌を流しながらの雑談は、方向の定まらない行ったり来たりのものである。クラシックの吉田さんと三橋美智也。そこで私は思い出した。

印刷会社の久保君の所へ行った時、彼も「今、車で走りながら三橋美智也を聞いているんですよ。実にうまい人ですね。」と言ったのである。久保君は、クラシック音楽の大ファンである。そして、当然のことながら、クラシック音楽に関しては何でも知っている。博学である。私も、いろいろと教わったし、音楽のテープを百本くらいもらった。それらの全てがクラシック音楽で、たくさんの作曲家と演奏家のものばかり、さすがに音楽通を感じさせるものであった。その中には日本の歌謡曲の類は一本もなかった。したがって「三橋美智也を聞いている」という言葉には、思わずオヤと思ったものである。あんなクラシックの大ファンが、三橋美智也に感動している。やはり良い音楽は、ジャンルを越えて愛されるのであろう。

ところで、吉田さんであるが「今度の定期演奏会には、シベリウスの交響曲第二番をやるんですよ。」と言う。私はその曲は聞いたことがない。シベリウスと言えば〝フィンランディア〟くらいしか知らない。

ロシアの圧政に苦しんでいたフィンランドの国民に勇気を与えたと言われるフィンランディアなら何度か聞いているが、交響曲第二番などという曲は、その存在さえ知らない。

そこで私は、交響曲第二番のCDを探してきた。「吉田さんにナイショで予習してやれ。」そして、これを何度か聞いてみた。しかし、馴染みのない曲であり、馴染みにくい曲なので、すぐに飽きてしまう。そうなると、どうしても敬遠し勝ちになって、余計につまらなくなってしまう。

そんなことをしているうちに、埼玉中央フィルの定期演奏会が近づいてきた。何とかもっと予習しておかなければと思いつつ、時間が過ぎていく。それに、全曲で四十五分近くかかるので、じっくり聞いているひまがない。二楽章あたりまで聞いてプツンとならざるを得ない。それでも、宿題が終わっていない小学生時代のように、仕方なしに何度か聞いた。

何しろ、音楽に関する何の知識もない人間がシベリウスを聞こうというのである。ピカソの晩年の絵に初めて出会った人のようなものだ。

しかし、そんなことをしながらも何回か聞いていると、何となく最初に聞いたときの違和感のようなものがなくなっていたのである。

そして、いよいよ演奏会の当日である。私は、少し早めに出かけ、ステージに近い席をとった。

最初の曲がシベリウスである。何回かの予習のせいか、何となくすんなり受け入れることができた。しかも、ホールでのナマ演奏である。指揮者もすぐそこ、吉田団長のバイオリンも良く見える。その上、CDとは迫力が全く違う。私は、すっかり良い気持ちになって「やっぱりあの曲は名曲なんだなあ。」と、わかったような顔をしてつぶやいたものだ。

何日か後、吉田さんに会った時、私は一部始終を白状してしまった。

「どなたか言ってたけど〝ダマゴと音楽はナマに限る〟だって。」と、吉田さんは笑う。

ところで、三橋美智也のナマを聞くことはもうできなくなってしまった。しかし、十二月にはショパンのピアノ曲のリサイタルがある。チケットはすでに買ってある。これはナマで聞けるのである。

ただし、今度は予習なしで行くつもり。

楽しみである。

「腹が立って仕方がない」

JICAシニア海外ボランティア　仙道　富士郎

年寄りになると、脳の制御回路の働きが悪くなって、怒りっぽくなると一般的に言われているが、そうかもしれないが、こんなに腹が立つことが多いのは、そのためばかりとは思いたくない。

一番の文句はマスコミに対してである。列挙して、今回の原稿としたい。

毎日が日曜日の状態の私は、テレビを観る時間が多くなる。先日、いわゆるトーク番組を観ていたら、コメンテイターの一人が、いま新聞をにぎわしている高齢者の所在不明問題について「なんで役所はしっかり調べてこなかったのだ」と言っていたのだが、なんでも行政の悪口を言えば事足りるというものではないのである。ここで最も問題にしなければならない点は、全部ではないにしても、一部に、親の年金欲しさにその死を隠してきた人がいるというなんともう悲しい我が国の世情を、この事件は明示しているという事なのである。私はこの人たちを責めようとは思わない。なんでも金で価値を判断する社会、自分のことだけ考えて、利他の心などどこかに置き忘れてきてしまった社会、風呂の水の音がうるさいと文句をつけるまさに非寛容の社会、このような社会の一つの産物として今度の事件を直視しなければならないのである。

また、勝手に世論をあおっておいて、あとでそれが間違っていたことがわかっても、一向に謝罪などしないマスコミに、政治家の非倫理性などをあげつらう資格などないのである。我が国で最も倫理性に欠けているのが、マスコミ業界ではなかろうか。このようなことは誰も言わない。怖くて言えないのである。マスコミにたたかれたなら、その人の社会的な存在価値は当分の間、奪われてしまうからである。

民主党が政権交代を果たして以来、その未熟さ故にか政情がコロコロ変わる。まだ一年も経っていないのだから、もう少しゆっくり見てやればいいのではないかと思う。しかし、見方を変えれば、このめまぐるしく変わる政情はマスコミが作りだしているとも言えるのである。何を言いたいかというと、しょっちゅう行われている政府の支持率などに関するアンケートが犯人だということについてである。政府が結果的になにかへまをしたとしよう。すぐに支持率のアンケートである。当然のことながら、問われた人たちは[No]と言う。そこで支持率は下がる。支持率が下がったという報道はさらに支持率を下げるように作用する。最近の政情は、この繰り返しで動いているように思えてならない。こんなに頻繁にアンケート調査などする必要はないと思う。私たちは基本的には、選挙を通じた投票によって政治家に政治を付託しているのであって、選挙から次の選挙までの期間の被選挙人の行動の内容を良くチェックして、次の選挙に挑むわけである。事実関係が明らかな、いわゆるスキャンダルによって首相が失脚することはありえても、いま事実そうであるように、マスコミが作り上げたいわゆる「評判」によって首相が変わるようなことは、ポピュリズム以外の何物でもないのである。

マスコミに関わっている人たちは、マスコミが、結果的には、政治を動かしているという現状を認知しながら、こんなことをやっているのだろうか。そうだとすれば、何をか言わんやである。認知しないでやっているのだとすれば、第二次大戦で新聞が果たした犯罪的役割をもう一回想いだしてもらおうか。

やはり、抑制回路が壊れているのかもしれない。話はどんどんエスカレートし、単なる悲憤慷慨になってしまったようである。

しかし、いまのマスコミによる政治報道に慣らされてしまった私たちは、事実としてマスコミが政治を動かしているのではないかという疑念の目を持ちながら事態を凝視する視点を失いつつあるのではないかと思えてならない。

このような発想も短絡的かなあ？

プ・リ・ズ・ム

季節のおとずれ　竹花家

今年もまた佐渡ヶ島で少し早めのお盆を過ごす事ができました。いつもながら総勢十八人の大所帯で、宿泊させて頂いていた池田多嘉子様には本当にお世話になりました。

四泊五日の旅行ですが、埼玉から佐渡ヶ島ということで一日目、五日目が移動日となり、なか三日のお楽しみ。今回の計画は海、海、海の遊び尽くし計画。

見事に晴れが続いた佐渡ヶ島で、竹花家の子どもたちはすっかり日焼けしてみんなまっくろ。やたらと色黒な家になっております。

記録的な猛暑の続いた夏が終わり、秋を迎えて運動会。我が家のアスリート、美也子は百M走、種目走で一位、リレーでも一位、所属する白組が優勝と、小学校での最後の運動会でこれ以上望む事はないだろうと思う程の有終の美。

ただ一つ気になったのは、秋の運動会とは思えない強烈な太陽光線と猛暑。竹花家の子どもたちは夏が終わって尚も更にまっくろになりました。

鈴木　洋一

河のほとりで　倉澤家

とにかく暑い暑い夏でしたが、皆さまお元気でしょうか。

この夏休み、特別支援学校に通う高校三年生の美季と、幼児さんや小学校低学年を対象にした園内保育を行いました。高校三年で就職を控えた美季に、労働して賃金を得ることの大変さを経験させたいという思いと、自分が誰かの役に立ち、感謝される経験をさせたいという思いから始めた園内保育でした。

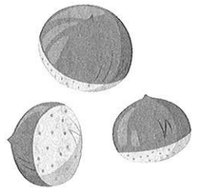
園内保育を始めた当初は、何をやっていいのかわからず、椅子に座ったままボーッと子どもたちのことを傍観するだけの美季でしたが、慣れてくると、おやつの前に幼児さんをトイレに連れて行ってくれたり、手洗いをさせたり、おやつの後片づけをしてくたり…と徐々に何をやればいいのかを理解し、手伝いができるようになってきました。園内保育終了の頃には、自分から幼児の所へ行き、ブロック遊びや人形遊びの相手ができるようになり、ほんの少しではありましたが、彼女の成長を感じることができました。

現在、将来的にも自立は困難と考えられる美季の進路について頭を悩ませている私たちです。

専門的なケアが必要なのか、彼女が笑顔でいられる時間をより多くするためにはどうすればいいのか、美季にとって何が一番大切なのか…あらゆる情報を集め、関係者の方々と連携しながら、彼女の今後の生き方のよりよいサポートが可能になることを願っています。

そして、どんな形になったとしても、私たちは家族であることを伝え続けていきたいと思っています。

倉澤　智子



子どもたちの季節　仙道家

まだまだ暑い日が続いていますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

二学期が始まり、子どもたちは毎日真っ赤な顔をしてそれぞれ帰宅しています。運動会の練習も始まり、なお疲れているのでしょう。

入所したばかりの陵もすっかり学校に慣れて友達もできたようです。入所した当初緊張であまり話すことができなかった彼ですが、二学期が始まってすぐクラスメイトの名前も覚え、楽しそうに教室や運動会の練習のことを話してくれます。特に運動会のダンス、組体操には気合が入っているようで、部屋で幼児と一緒にダンスの練習をしているくらいです。幼児もダンスを覚えてしまいました。当日、子どもたちの頑張って来た成果を見るのがとても楽しみです。特に入所後不安を抱え、緊張の中頑張った陵の姿には、涙してしまうに違いないと思っています。

田口　貴子

光の中で　佐藤家

酷暑と言われた異常な夏も終わり、ようやくすごしやすい季節になってまいりました。おかげさまで真っ黒に日焼けした子ども達は、この夏の異常気象にも負けることなく、怪我や事故もなく、ひとまわり大きく成長し、二学期を順調にスタートしております。

今年も八月十三日から十六日まで、増田政一氏のご厚意で静岡県伊東市の別荘をお借りして、帰省できない子どもたちのための宿泊行事を行いました。海水浴・花火大会・温泉など盛りだくさんのプログラムと、地魚の料理で心もおなかもいっぱいの思い出を残すことができました。

もう一つこの夏の佐藤家の思い出の中に、七月七日から九月八日までの二ヶ月間カリフォルニア州立大学デービス校から来日したバネッサさんと共に過ごした日々があります。日本語が堪能でダンスと歌が上手な彼女は、自然と子ども達とうちとけ、登山や海水浴をはじめとことん遊んでくれました。バネッサさんがいることが当たり前だった二ヶ月間、帰国されてしばらくは少し灯が消えたような思いがしました。

穴水　祐介

原田家日記

暑さの新しい表現を模索したくなるほどのこの夏。二学期を迎えた今も残酷暑は継続中ですが、いかがお過ごしでしょうか。今年も子どもたちと共に海へ山へ川へと、楽しい時間を無事に過ごすことができました。

毎年恒例になっている秋田への旅行、今年は子ども七名大人三名の総勢十名の大所帯で行って参りました。秋田に着いて三日目、狙ったようにピンポイントで直撃した台風でしたが影響はほとんどなく、むしろそれが通り過ぎることによって、四日目に絶好の海水浴日和を迎えることができました。青空の下、一日中海で過ごし、夕方子どもたちから「もうそろそろ帰ろうよ」と言われるほど楽しい時間で満たすことができました。「さあ、今日は秋田で最後の夜だから焼き肉屋でごちそうだ」「いえーい」と、子どもたちとヒートアップしながら帰路につくと、ななんと車までヒートアップしてしまい自走不能に…。結果的に廃車することになり、諸々の理由から帰宅日を一日延ばすことにしました。帰宅策を練る大人を尻目に子どもたちは得した気分で大喜び。波瀾万丈の今回の旅を一言で表すとしたら『塞翁が馬』でしょうか。何よりも子どもたちにとって良い思い出になるのであれば、トラブルもまた必要な演出だったと前向きに捉えたいです。

小西　剛史

養護メモ 135

はたらき その2

菅原 哲男

その子の家族関係への関わりは不能な状態で、受け入れ後の見通しについても、再生はあり得ないものであった。

受け入れについて数回にわたる児童相談所との協議の中で、家庭復帰の可能性は全くないので、創立以来全員が高校に進学し、それまで高校中退率も五%以下の、光の子どもの家から社会に出してほしい。と強く要望されたのだった。

かなり大きな覚悟を伴う入所依頼で、職員会議も難航したのである。結局、受け入れ後に担当者の変更をしないで済むように考慮し、最も安定した保育士を担当にした。定年退職目前の施設長の退職時期を延長して光の子どもの家の総力を挙げて受け入れる決定をしたのだった。

その後六年も過ぎた、藪から棒な里親委託への方針だったのである。

里親委託に不承知な光の子どもの家と、児童相談所のそんないきさつなど何も知らず、ほとんど意見を表現しない担当ワーカーと、里親委託にはあまり気乗りしない様子がありありの心理職と、ハンドルが里親委託に固定されたブルトーザーのように精力的な里親担当氏による協議はそれほど急ぎもされないで断続的に続いたのであった。

その頃、入所依頼をしたワーカーと偶然出会い事情を話した。今は他の県立の施設長になられているその人は、「あの子に里親委託は考えられないが、思春期入り口のこの時は更に考えられない」と、苦しそうにつぶやいたのだった。

児童相談所は県知事などが最終責任を負っている強固な権力機構の現場である。権力機構が適切に運営されるために、職員の定期・不定期の異動がある。

児童養護施設は、何らかの事情を抱えた家庭が崩壊し、家族が離散した子どもたちを預かって養育するところである。

通常子どもの養育は、生んでくれたその母であり、肉親として関わるその家族の責任下にある。そして、父母にとっていくつになってもそれが自分の子どもであるという関係にある。いくつになっても親は親、という継続的な営みの中で、その人以外に母でも父でもないという誰もその人に代わることが出来ない、かけがえのない存在の個別的な関わりでなされていくものである。家族の個別性や継続性は自明のことである。

満足、不満足などいかなる条件にもよらないかけがえのない存在が親であり、子であったのだ。

そのような、子どもたちが失った家族に代わり、家族のように養育するのが児童養護施設のはたらきである。本来的に代われない存在に代わる営みである。

こう見てくると児童相談所と児童養護施設は、元来機能や役割において全く違う構造になっていることがわかる。代わることを前提にはたらく児童相談所の、入所依頼をした職員と数年を経た後の職員では全く異なる対応をするのである。入所依頼の時の児童相談所のワーカーは、いわゆる仲人口であり、それが後まで継続されるという保証は何もないのと同じなのである。

それでも方針が出されるとお役所は何が何でも推し進める。私たちが無力感を最も感じるときである。

お年を召されていたが、人柄や経験、知識など充分な里親が紹介された。夏休みを利用して里親家族と関係をつくり、その子の心も揺れながらその年度末には里親宅に行くことを決意したのだった。

驚いたことに、かなりのいきさつを繰り返し、委託手続きに入った年度末、それまで関わっていた児童相談所のチームの四人中三人が定期異動になって新年度を迎えたのである。

中には顔見知りもいたが全く新たな職員は、これから里親委託に関わるので、子どもや里親と関係をつくりたい、子どもと面接をすると言い出した。

子どもにとってはたまったものではない。前述したように複数の年度を超えて委託の準備をしてきていたのである。日常的に関わりを持たない児童相談所の職員と時間をかけてつくった関係を、全く別な人格に切り替え新たな関係を築くという。また数年を要し、そのうち子どもは大人になってしまうのだ。

手だてを尽くして手続きを省略するよう働きかけた。その子は予定よりも数ヶ月遅れて秋の運動会を里親家庭への導入にして転校していった。

お役人が強引にことを進め、大雑把な取り組みから受ける子どものマイナスを可能な限り取り除き、補い、プラスを積み上げていくはたらきも児童養護施設は負わされている。

現場から

虹を見上げて

牧野 由紀子

三年前、私はグループホームを担当することになり、本園で担当していた子ども達との別れを経験しました。別れと言っても、車で五分ほどのグループホームへの異動であり、関係が切れてしまうものではないと分かっていましたが、責任担当制の中で、三年間寝食をともにした子ども達と離れ、新たに担当する子どもたちとの関係作り・・・頭では割り切れても、気持ちの整理は簡単ではありませんでした。その当時毎日付けていた記録を見返すことも、今この文章を書くときまで出来なかったのが正直なところです。特に、関係作りの真っ直中であった美貴の担当を外れるということは、私にとって悲しさだけでなく悔しさも大きいものでした。

グループホームへの異動の発表があった日、美貴は「やだ～やだ～美貴も引っ越す!!」と手足をバタバタさせ大泣きし、そのまま泣き疲れて眠ってしまいました。どんなに「担当じゃなくなっても、美貴がずっと大好き！応援してるから！」と繰り返しても容易に受け入れられる事ではありませんでした。引っ越しの直前には「これ、一緒にお出かけしたとき買ったよね？」と一つ一つ荷物を片付けながら、二人で抱き合ってボロボロ泣いていました。

私がグループホームに異動した後も、本園で私の姿を見かけるたびに「ママー!!行かないでー!!」と大泣きし、職員に抱きかかえられていた美貴。そのころ、私は新たにグループホームでの生活が始まり、それだけで手一杯のこともあり、ゆっくり別れを惜しむことはできませんでした。ただ、別れを惜しむ表現が出来るようになった彼女の成長を感じることで、私自身も前に進もうとしていたのだと思います。

年子の姉妹、美貴と美歩を担当することになったのは六年前。前担当者が去っていく姿を見て、私に対して「お前が来たから山口さんは居なくなったんだ！」「お前なんかどっか行け！」などと全身で前担当者と別れる悲しみを表現していた妹の美歩のそばで、当時、年長の姉の美貴が「大丈夫だよ」とティッシュを片手に妹の涙をぬぐってあげていたのはとても印象的でした。そんな「いい子」の美貴は自分の思いをうまく表現できず、ただ泣いて大騒ぎしたり、椅子やゴミ箱をひっくり返してみては、はっと無表情になったり・・・彼女はいったい何を考えているのだろう、こちらが向かえば向かうほど、彼女は頑なに拒否し、担当者である私が関われば関わるほど、別の職員の元へスルリと行ってしまう。そして、ニヤリ笑いながら私の様子をうかがう。当時、大学を卒業して間もない私は、「この子とはきっと相性が悪いんだ」と思うことでどうにか彼女との距離をはかり、「時間が解決してくれる・・・」と思いながら日々を過ごしていたこともありました。そんな彼女が夕食後、食器を片づけている私の元へやって来て、「美貴だって悲しい」と言ったのは、担当して三ヶ月が過ぎた頃でした。彼女はほんの少しずつ、自分の思いを発信し始めました。しかし、私はそれに気づけない事も多く、彼女とトラブルの絶えない日が続いていました。

小学校に入学し二ヶ月が経った頃、いつものように下校時迎えに行くと「いいな～〇〇ちゃんちはお母さんが迎えに来て。だって、牧野さんって美貴のお母さんじゃないでしょ」と美貴が言いました。もちろん、毎日母が迎えに来てくれる友人をうらやましく思ったり、母に会いたいというストレートな気持ちは常に持っているでしょう。しかし、その言い方は、私にそんな思いをぶつけると同時に、"美貴のお母さんじゃないのに来てくれるの？"という私に対する疑問と小さな期待でもあったように思えました。

現在、美貴とは月に一度「美貴の日」を設け、その日は美貴と個別に過ごすという関係を継続させてもらっています。毎月、「ママ～今月はどこ行く～？何する～？」と楽しみにしてくれています。現在五年生、思春期に入り、「もう、一緒にお出かけしない」と言い出す日も近いのではと思う時もありますが、それはもう少し先のようです。

こうした関わりを通して、責任担当制の中で担当の枠を越えて継続できる関係・・・そのような関係というのも子ども一人一人にとって必要な関わりではないのだろうかと感じさせられています。

2011年度も 基準外職員確保のための
バザーを行います。
品物のご協力をお願いします。
☆光の子どもの家バザー実行委員会☆

日誌抄 ＝子どもと創る暮らしの風景＝ 2010年6月1日～2010年7月末日

2010年6月現在
幼児9名　小学生13名　中学生9名　高校生6名　措置外5名　計42名

1日　ILBS国際福祉協会の受領式でロシア大使館へ田中施設長と菅原SV
4日　成黎が里親宅へ　2日に成黎の送別会をし別れを惜しみつつ新たな生活の場でも頑張れと皆で応援　これでお別れではなく成黎の応援者として里親とのやりとりを今後も続けていく
7日　恵利と春樹が入所　物静かそうに見えて気の強い恵利と元気一番のやんちゃな春樹を岩瀬保育士が担当
25日　東埼玉バプテスト教会の木田牧師による夕礼拝　感謝
28日　東大宮教会の教会学校教師との懇談会　日頃からお世話になっている先生方と子どもたちについて話し合う貴重な機会

7月
2日　グループホーム見学に児童養護施設あゆみ学園より3名来訪
杉本英夫様による夕礼拝　感謝
6日　山口県の児童養護施設共楽養育園より見学に5名来訪
12日　小学校との連絡会
13日　関東ブロック職員研修へ田中施設長と穴水　今後の児童養護施設のあり方について他分野から貴重な意見が多数出される
15日　長年お世話になっている東京電力ハムコ会の新会長瀬尾様と大塚様が来訪見学
陵が入所　体が大きくしっかりしていそうでちょっとおちゃめな小学生　田口保育士が担当
20日　夏休みオープニングパーティー　子どもたちが輝き大きく成長を遂げるだろうこの季節を前向きに迎える
22日　小学低学年生の山登り　秩父の自然を堪能
26日　小学高学年生の山登り　長野の黒斑山から浅間山の噴煙を間近に観る
31日　古河市の夏祭りへ神輿様よりご招待頂く　小学生を中心に祭りのみこしを担ぐなど楽しい時間　感謝

《6・7月の物品ご寄贈者》
加ト吉　木村昇　ハムコ会　奥田哲也　金沢勝一　橋本一男　ビームス　伊豆屋　穴澤勝　小島　大石　㈱あさひ建材工業　㈲塚田　㈲島田米菓　㈲スパンキーズ　藤沼畜産　マルキチ物産　福島章　内田正一　金久保公男　豊国道江　因泥由紀夫　山口榮子　木村昇　木村優作　木村正広　金沢勝一　小谷野利子　飯野弥生　真田明恵　木村栄　栗原栄一　後藤利子　松本明子　斉藤康光　川口雅資　市川光一　他多数の御各位様
☆夏休みを終えて大きく成長を見せてくれる子どもたち　皆様のお支えを心より感謝申し上げます（洋）

反射光

☆長い長い夏はどこまで続くやらと途方に暮れるほどの猛暑日続きからやっと秋の過ごしやすさを感じられると思いきや季節はもう冬に向かっております☆今年も夏を豊かに過ごすことができました☆多くの方々によって支えられ子どもたちは存分に夏を満喫できたと思います☆高校三年生の二人は夏休みの間もオープンキャンパスやAO入試また就職実習と卒業後の進路を見出そうと励んでいました☆光の子どもの家から卒園し就職または進学をする子どもたちの為にと去年十月に多くの方々が発起人となって下さり開設した「光の子どもの家自立進学基金」☆実際に基金を利用させて頂き四年制大学に進学して励んでいる卒園生もおります☆基金が支えるのは卒園生のみならず光の子どもの家で暮らす子どもたちが受ける希望☆共に暮らし合った卒園生たちが大学や短大等の上級学校へ進学していく姿を見て応援する☆じゃあ自分はどうしようか何になりたいのか☆そんな問いの中で自身の可能性を見出し力強く自分の道を歩いていってほしいと願い祈りながら生活を創っていきます☆お支え下さる多くの方々に心から感謝しています☆私たちのはたらきは決して私たちのみで完結できません☆更なるご理解ご協力をよろしくお願い申し上げます☆（洋）